

黙ってはいけない、子どもたちのために

志村毅一（経営懇顧問、東京・(福)民友会元理事長）

私は十五年戦争といわれる 1930 年から 45 年までの戦争の途中に生まれて、小学校 2 年生の時、敗戦となりました。その時にはもう、完全な軍国少年でした。私の父も母もそんなに戦争に協力的ではなかったし、疎開先の田舎の小学校では、カエルを取ったり小川で粘土をとったりしていて、軍国教育を受けた記憶はありません。にも関わらず、小学校 2 年で「やっぱりこの戦争は勝たなきゃいけない、鬼畜米英をやつけよう」となったのはなぜか。今よく考えてみると大人が黙っていたからではないかと思います。

今と似ているように感じますが、みんな黙ってしまった。おかしいなと思う人や戦争には賛成じゃないという人が物を言わなくなった。みんなが黙ってしまうと、小学校 2 年生の私の耳には「戦争すすめよう」という声しか入ってこないんです。みんなが黙ってしまうと、何かしようという悪だくみをする人の声が強くなる。私は今、切実にそれを感じ、不安に思っています。

私は今、何を言わなきゃいけないのか？ 大人が何を言わなきゃいけないのか？ 2 度と私のように軍国少年になるような子どもが出ないようにするためには、今、大人が何を言うのか。みなさんが本当に大事にしておられる子どもたちが、私が経験したような目にあわないためには 今、大人が言わなきゃいけない。「おかしいことはおかしい、それって違うんじゃない？」って、言わなきゃいけないんじゃないか。今は、そういう時なんだ、と私は思っています。

今はまだ、思っていることを言えます。言うことは 勇気もいるかもしれないし、大変なことだと思いますが、言える人たちが言わなきゃいけない。

日本には戦争の放棄をうたった九条を中心とする日本国憲法があります。憲法には、戦争でアジアの国々を侵略した体験、原爆や空襲での被害の体験、そうした体験から戦争は嫌だ、というたくさんの人たちの思いがこめられています。そのことを心にとめながら、子どもたちを守る活動をこれからも進めていきたいと思っています。

（2026 年 1 月 12 日セミナー懇親会での挨拶より／要旨。事務局まとめ）